

序

本学の教員が国際的にも高く評価される研究を推進するという目的に沿って今年度も研究活動一覧（第23輯）が刊行の運びとなった。研究の検証システムの一環として開学以来続けられているものであり、その主旨は教員によりよく理解され、研究の活性化に十分役立っていると評価される。

平成11年には更に関係各位のご努力により富山医科薬科大学「研究者総覧」が刊行され、研究者個人のプロフィール、研究内容、業績をも含めて公開された。研究活動一覧と照合することにより、社会に開かれた大学として今後推進すべき産学連携にも大いに貢献することとなった。

さて、研究の活性化はこの様な検証システムにより競争的環境を生み出し、研究員のモチベーションを高めることが重要であるが、やはり研究費の額及び研究員の質、量も必要な因子である。ご承知の如く日本経済は現在なお低迷を続けており、そこから派生する財政構造改革の必要性から、平成11年度の文部省一般会計は厳しいものであった。一方、科研費等は研究活動の活性化を促進させるものとして増加の傾向にあり、今や講座費をあてにすることなく、科研費を含むすべての外部資金の導入に努力すべき事を強調したい。国立大学の独立行政法人化が焦眉の課題となっている現在、従来の“親方日の丸”の考えを捨て、自己意識改革に基づく自助努力こそが大学の個性化に連なる唯一の戦略であろう。

学 長 高 久 晃